

日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (C) (一般)

課題番号 21K00170 研究代表者 児島 薫

日本と台湾における都市からみる「故郷」の表象とその比較—1930 年代を中心に

塩月桃甫再考—風景画を中心に	はだ 羽田ジェシカ	3
藤島武二が訪れ描いた台湾について	児島 薫	21

藤島武二が訪れ描いた台湾について

児島 薫

はじめに

- 一、『台湾日日新報』の記録
 - 二、平川知道による藤島の旅程
 - 三、藤島が好んだ画題
- おわりに

はじめに

藤島武二は台湾に台湾美術展覧会の審査員として三度出張しているが、このことはこれまでの藤島武二展図録や画集の年譜では明確に書かれていなかった⁽¹⁾。また実際にはそれ以外にも一回行っており、合計4回台湾を訪れている。

最初の出張は1933(昭和8)年10月で、7回台湾美術展覧会(以下、台展と略す)の審査員としてである。結城貞松(素明)と藤島の2人が内地から派遣され、台湾本島からは塩月善吉(桃甫)、小澤秋成、郷原藤一郎(古統)、木下源重郎(静涯)、廖継春、陳氏進の6人が審査員に任じられた⁽²⁾。翌34(昭和9)年8回台展に際しては松林桂月とともに出張し、島内からの審査員は、塩月善吉(桃甫)、郷原藤一郎(古統)、木下源重郎(静涯)、廖継春、顔水龍、陳氏進の6名であった⁽³⁾。そして3回目の1935(昭和10)年9回台展には藤島武二、梅原龍三郎、荒木十畝、川崎小虎が内地から出張し、島内からの審査員には塩月善吉(桃甫)、郷原藤一郎(古統)の2人のみが任じられた⁽⁴⁾。

台展審査員としての訪台は公的記録もあり、これまでも台湾美術展覧会研究の側からは知られてきたことであるが、なぜか藤島の略歴を繰り返しまとめた隈元謙次郎による最も詳しい評伝でも、「台湾に遊んだ」「台湾旅行」といった私的な行動であったかのような記述である⁽⁵⁾。その後の最も詳しい年譜は中島理寿氏によるが⁽⁶⁾、1933年「10月 台湾を旅行、最高峰の新高山の日の出を取材する」とあり、1934年では「同月(筆者註:12月)初冬の台南地方を訪れ、40日間滞在する。翌年1月に帰国する」と記し、1935年10月の項で「台湾美術展覧会の審査員として梅原龍三郎とともに台湾を訪れる」「同月 第九回台湾美術展覧会(台北教育会館)に審査員として《波濤》を出品する」という記述となっている。あたかも1935年のみに審査員であったかのように読みとれる。

一方、東京美術学校に藤島が提出し、その後、書き加えられていた履歴書には1933年10月14日に東京美術学校から「学術研究ノ為台湾へ出張ヲ命ス 但往復共三週間トス」とある。しかし1934年の台湾行きについて

は記載が無く、1935年10月8日に東京美術学校から「学術研究ノ為台湾へ出張ヲ命ス 但十月十四日より往復二十日間トス」とある。これに対して1935年5月1日付で朝鮮総督府から「第十四回朝鮮美術展覧会審査委員会委員ヲ嘱託ス」と命じられた記載が後から行間に書き加えられており、同年5月7日付けで東京美術学校より「学術研究ノ為朝鮮へ出張ヲ命ス 但五月八日より往復共十三日間トス」と記されている。このような台湾美術展覧会と朝鮮美術展覧会とでの記載の違いの理由は不明である。実際のところ、藤島の台湾出張はどのようなものだったのだろうか。

一、『台湾日日新報』の記録

藤島の台湾出張に関しては、『台湾日日新報』が細かく報じている。1933年から35年までの記事に基づいて藤島の行動を辿る。以下、掲載紙の日付け、頁をカッコのなかに入れて示す。正字体は適宜当用漢字に直した。

1933年の台展審査委員として、藤島武二は10月19日に台北に到着し鉄道ホテルに投宿(「人事」10月20日、二面)。25日に西洋画の主任審査委員として審査を終え、求められたコメントのなかで「意外に立派な作品があり、進歩の点も非常に著しいのに喫驚した」とし「従来美術展覧会は類型のもの許り多く統一的傾向があつたが現在は現在の傾向として個性を発揮したるものが尊重され、従つて台湾に於ては独特の自然の風景、習俗の特色に目を向ける事が肝要と信ぜられる」と述べている⁽⁷⁾。

26日に総督府官邸で慰労の午餐会が開かれ、藤島、結城が招待される⁽⁸⁾。その後11月4日6時から蓬萊閣で会費制の懇親会が開かれている(11月3日、二面)⁽⁹⁾。これは藤島と、私的に来台中であった梅原龍三郎を招待するもので、台展関係者や弟子たちを中心に、美術愛好家まで含む大きな会となったようである。そして11月15日、藤島は内地へ出立する(「人事」11月16日、二面)。一ヶ月近い滞在であった。

1934年の8回台展審査員が決まったことは9月9日に報じられている⁽¹⁰⁾。今回は東洋画は松林桂月、西洋画が藤島である。前述のとおり、本島からは郷原古統、木下静涯、陳氏進、塩月桃甫、廖継春、顔水龍が審査員に選ばれている(1934年9月9日、二面)。1934年の台展

審査のために藤島が朝日丸で基隆港に入ったのは10月16日だが、当日の悪天候のため着岸が2時間以上遅れて4時50分に漸く到着し、同船の顔水龍とともに記者のインタビューに答えている(10月17日、七面)。新聞記事には二人が代わる代わる語ったことをまとめた内容を記しているためどちらの意見かは不明ながら、審査については「成るだけ土地の風景即ちローカルな気分を出す写実と言ったものを薦め度い」と述べている⁽¹¹⁾。台北では再び鉄道ホテルに宿泊している(10月17日、七面)⁽¹²⁾。また記者に「十七日朝台南に行きます、審査前日には帰北します、審査がすめば阿里山へ行つて絵を描きたい計画です、しかし今年はゆつくり台湾に居て絵を描きたいのですが東京で一寸急用が出来てゐるので来月の十日頃に帰るつもりです」と語っている⁽¹³⁾。到着早々に台南に行き、また台展審査とは別に訪台することも予告している。翌年の『朝日新聞』の記事で藤島は「十二月から一月にかけての初冬を四十日間台南に過ごした」と述べていることから、やはり冬に台湾を再訪し、台南に長期滞在したことがわかる⁽¹⁴⁾。

『台湾日日新聞』に戻るならば、台展の出品作品の搬入は18、19日で、審査は20、21日におこなわれると報じられた(10月17日、七面)⁽¹⁵⁾。審査終了後には「藤島画伯あす阿里山へ」の見出しの記事があり「台展審査主任藤島武二画伯は審査も終了したので二十四日台北駅発夜行にて嘉義經由阿里山に登山し三日ばかり滞在の予定で得意の麗筆をふるひ山岳風景を描く由である、なほ二十八日には台南に向ひ十一月一日朝帰北する筈」(10月23日、七面)と報じている。そして11月1日には予定通り台北に戻り、鉄道ホテルに投宿している(「人事」11月2日、夕刊一面)。藤島は阿里山だけでなくこのときも台南に向かっており、よほど台南が気に入ったようである。

一時帰京しなければならない「東京で一寸急用」というのは、おそらく12月3日に帝室技芸員に任じられたことを指すのであろう。帝室技芸員を拝命してからまた台湾に向かい、12月25日に朝日丸で台湾に到着した(12月26日、十一面)⁽¹⁶⁾。そして「十一月中旬帰京して又改めて出直して来ました、今度は南部地方に参り一ヶ月計り仕事をしたいと思います、帰京すると直ぐ帝室技芸員を命ぜられたのですが之れは自分本来の仕事と何等

抵触するやうなことはありません」(12月26日、十一面)と語っている。そして翌1935年1月26日に南部から台北に戻り(「人事」1月27日、二面)、2月1日に内地へと出立した(「人事」2月1日、夕刊一面)。南に滞在したのは、到着の翌日に台北を発ったとしても12月26日から1月26日までであるので、四十日間ではなく、ほぼ一ヶ月である。

1935年9月には9回台展の審査員が内定する。内地からは前述のとおり藤島武二と梅原龍三郎、荒木十畝と川崎小虎の4名で、その分、台湾出身の審査員は減らされ、塩月桃甫と郷原古統のみになった。藤島たち4名は吉野丸で18日に基隆港に到着した(10月19日、七面)⁽¹⁷⁾。このとき梅原は「約三週間の予定で阿里山方面に画題を求めて旅行をするとのことである」と報じられている(10月16日、七面)⁽¹⁸⁾。審査を終えた藤島は「展覧会の成績は年々進捗の跡がいちぢるしく、本年度も努力した立派な作品があつた、本年度は例年に比して出品が減じてゐるが入選が多くなつてゐる、緩選と云へば誤解があるが皆相当に質の上から見てよい作品があつた(中略)又各作品に現はれたものを見ても台展特殊の画材などに富んで今度の作品はその特色を十分發揮してゐるのでこの点は非常に結構である、この土地に住する作家は郷土色に恵まれてゐる、将来益々此の方面に發展して行くと信ずる」と語っている(10月22日、十一面)⁽¹⁹⁾。その後の動静は報じられていないが、11月5日の午後3時に台北駅を発って帰途に就いている(「人事」11月5日、二面)。

二、平川知道による藤島の旅程

以上藤島の台湾出張の行動を新聞から辿ったが、さらに詳しい様子を伝えてくれるのが、平川知道による「藤島先生にお伴して」(『新高阿里山』1935年1月)という文章である⁽²⁰⁾。平川知道(1904年2月18日生まれ、没年不詳)は洋画家であり、6回から10回まで台展に出品している⁽²¹⁾。また「藤島先生にお伴して」の著者の肩書きとしては「文教局」となっており、現地で官吏であったことがわかる。記録によれば1922年から1944年まで台湾での勤務歴があり、最初は台北市役所財務課であるが、1928年から1935年までは文教局に勤務している⁽²²⁾。藤島の出張した頃には台北での生活に充分精通し

ており、案内には適任の人物だったと言えよう。

「藤島先生にお伴して」の文章の冒頭で平川は「去年の丁度今頃であつたか、先生のお伴をして^{ガランビ}鵝鑾鼻へ行つたことがあつた。その折先生は「此の処は我が国最南端の一角だ、再び来機会はないだらう」と申されて、去るに臨みいかにも感慨無量の面持で縹渺たる海原をいつまでも眺められて居られた」と記している⁽²³⁾。また、この文章の別のところで平川は「去年先生と屏東のサンティモン蕃社に行つた時、先生を余りに御老体扱ひにして、ほんとに恐縮した事があつたが、先生のお元気さには全く驚くことが度々であつた」と述べている⁽²⁴⁾。鵝鑾鼻や屏東に行った時期については『台南新報』に記事があり、後でまた触れるが、藤島は10月27日に鵝鑾鼻方面を視察し、同日夜、四重溪温泉に一泊、28日に屏東郡を視察、同夜高雄に帰っている⁽²⁵⁾。

平川の文章に戻ると、平川は、「前年」に藤島のお供をしたときに「鵝鑾鼻には再び来られないとしても、向後、先生の御来台を得て、見て戴かなければならぬ所が少なくない。疲労を感ずるやうな名所旧跡巡りではなくして、是非行つて見て戴き度い所に阿里山とタロコ峽があると云つたことを記憶してゐる。幸ひ此度先生には、絶勝の地阿里山へ行かれると聞いて、私は躍如として喜んだのであつた。それは先生に是非描いて戴かななくてはならない新高の霊峯と日の出があつたからだつた」と述べている。したがって藤島は1934年に阿里山を初めて訪れている⁽²⁶⁾。

さて平川は、審査終了後の1934年10月23日夜、藤島と台北駅を発ち、24日未明に嘉義に着いたと記しているが⁽²⁷⁾、『台湾日日新報』は翌日24日の夜発の日程を報じていたので一日食い違う。しかし平川が「予定より一日早く台北を^マ立つた」ためにあちこちに電話をかけて旅行の便宜を計ってもらわねばならなかったと述べているため、23日の夜出発であつたとしてよいだろう。夜行列車でビールを酌み交わしながら藤島は「時日さへあれば鵝鑾鼻や四重溪温泉にもう一度行きたい」と言っていたという⁽²⁸⁾。寝台車で眠り、翌24日夜明けの、6時頃に嘉義に到着し、阿里山行きの汽車に乗り換える。青柳旅館というところから朝のパンと昼の弁当が届けられ、8時に市役所の人たちに見送られて出発した。この時の汽車には二等車両が無かったため、6時間余りを三

等車に揺られて行くことになった。その間に営林所倶楽部のガイドが、阿里山の地図を広げて説明をしてくれたという。宿泊所としては営林所倶楽部と阿里山ホテルがあり、阿里山ホテルに泊まることに決めた。阿里山行きは「嘉義出身の画家でTと云ふ人の切なるすすめであつたとは云へ、先生には、多年の宿望であられたと考へる」と平川は述べる⁽²⁹⁾。Tとは誰であろうか。嘉義出身で東京美術学校に学んだ画家といえば陳澄波がよく知られている。アルファベット表記はChen Cheng-poであるが、日本語のローマ字表記としては「ちん」をTinと表記することもあつたので、陳澄波であつたかもしれない。

平川は繰り返し藤島が阿里山を描くことへの期待を述べる。「殊にあの新高の霊峰を、あの日之出を、あの雲海を赤陽を、阿里山風景をおかきになられることに対し、我々本島在住者は共に悦び、且感謝しなければならない」と述べている。汽車はだんだんと高地に登り、トフヤ社とタッパン社の蕃社が見えるところを過ぎると檜の森林に入り、神木がある神木駅で逆行して阿里山駅に到着する。阿里山ホテルでは眺めの良い部屋を用意され、宿泊する。最初は雨が降っていたが夜には晴れる。

25日の朝5時に平川が藤島の居室を訪れると、4時から用意して待っていた様子で、厚着をして山道を歩む。舗装された自動車の道があつたが、歩いて登ったようで、5時20分に出て6時20分の日の出の6、7分前に到着しているので、約一時間歩いて登ったことになる。平川は藤島が朝日が昇る瞬間を捕らえ、素早く筆を走らせる様子をありありと伝える。「先生はやがて、ネーブルスイエローでぐつとキャンパスの中央を一面にぬられた。(中略)先生は急足に新高を^マ書き始めた。紫外線よけの眼鏡をお掛けになり、太陽を画いておられたが、変化のはげしいのは朝の風景だ。いつしか四方より、濃霧が迫り新高の連峰を蔽いかくしてしまつた。時計は八時である。私は画架やキャンパスを片づけた」と予定より早く、約1時間40分で撤収している。《旭光(新高山)》(アーティゾン美術館)はまさに中央を黄色い絵具で塗り、旭光を描き加えているようである。

平川は「先生は此度宮中に献上されるため新^マ新高の山をお描きになられるとのことである。私はその時、先生の言を聞いて涙さへ浮かんだ」と述べ、続けて「大芸術

家の心情を思ふ時、多年の宿望とは実に先生が宮中に献上されんとして日頃、雄渾極りなき山岳の美と、永久不変の日の出の燦爛たる美をお描きにならんとしたことかと、私は強く胸うちたるをおぼえた」と述べている。当時藤島は皇太后の下命で天皇の御学問所を飾るための油彩画を制作しており、その画題を日の出と定めて各地を巡り、理想の日の出を描こうとしていた⁽³⁰⁾。したがって、蔡家丘氏は平川の感動は「絵そのものからではなく、取材から献上にいたる過程の意味を察知して感極まっているのだと理解できる」と指摘している⁽³¹⁾。「我々本島在住者は共に悦び、且感謝しなければならない」とも述べていたことと合わせると、中央を遠く離れた辺境の地が藤島の手で記録され、宮中へと届けられることに平川が多大な意味を見いだしていることがわかる。

藤島はもともと富士山から見た日の出を描きたかったが、富士山に登って描くことの困難を考え、交通が比較的便利な高山ということで阿里山を思ったという⁽³²⁾。「殊に台湾が領土となつて新たに日本一の高山となつた山であるからそこに特別の意義を見出し得るやうに思つた。私は尠からざる期待を以てこの山へ登つたのである」⁽³³⁾と述べており、富士山に代わる日本の象徴として新高山に期待している。さらにそれは帝国日本となつて領土を拡張したことを記録する意味も含むことになる。そして藤島が視る日の出は、やがてその絵を介して天皇が視ることになる。藤島が献上するのは実際には一点のみであるが、各地を行脚して試作を繰り返すことを通じて、各地の人々は、自分たちの土地が天皇によって「視られる」栄誉を想像したのであろう。それは古代日本で行われた天皇による「国見」を代行する行為とも言える⁽³⁴⁾。

ただし蔡氏も指摘するとおり、藤島は新高山が連山のなかの嶺であることに落胆していた。その理由について藤島は次のように回想している⁽³⁵⁾。

「私の考へた日の出は水平線に出来るだけ近い、新しい赤い太陽でなければならないといふ最初からの考へであつた。先づ雄大な景観といふことから、誰にでも思ひ付くのは富士の日の出である」と述べるが、富士を描くには相当の期間富士山に登って研究をしなければならなかったため、断念しなければならなかった。「次に交通に比較的便利な高山といふ意味で阿里山から眺めた新高山を思ひ付いた。こゝは軽便鉄道もあり、殊に新高山は台湾

が領土となつて新たに日本一の高山となつた山であるからそこに特別の意義を見だし得るやうに思つた」と期待を持って登つたという。「ところが実際に眺めた新高山は予想とは大分違つて、この辺り一万尺以上の高峰が連つてゐる上に一寸頭を出してゐるだけである。従つてこゝから出る日の出は余程高く上つた日の出であり、山を離れると鏡のようにキラツと光つて見える。これでは最初の考へとは違つたものになる。絵としては面白いものになつても、日の出といふ感じには何としても遠いことを免れぬ。一体日の出を描く場合色々なものが入つては面白くないというのが最初からの私の考へであつた。前景に他の山が沢山見えては高嶺の気も欠き、莊重の感じも薄くなる。出来るだけ單純にといふ私の気持には新高の日の出もやはり不適當といふ他はなかつた。」⁽³⁶⁾と述べている。したがって、藤島がこの後再び新高山を描きに行くということは無かつたはずである。

このときの体験を元に描いたとみられる《旭光（新高山）》（1935年、アーティゾン美術館）について⁽³⁷⁾、蔡氏は藤島が《旭光（新高山）》で「近景を省略し、日の出を強調した特徴がある」とし、藤島が自分の「意図と合致するように構成を調整した創作手法が窺われる」とその手腕を評価している⁽³⁸⁾。確かに、本作では新高山より手前に見えていたはずの山々の峰や樹木は、大きな筆でざっと塗るだけに留めて具体的には描いていないが、あるいは濃霧が周囲を覆い隠したことによるのかもしれない。太陽はかなり空高く昇っており、周囲もすっかり明るくなっている。最終的に宮中に届けられた《旭日照六合》（1937年、皇居三の丸尚蔵館）や、それとはほぼ同構図の《蒙古の日の出》（1937年、アーティゾン美術館）では地平線からわずかに顔をのぞかせた太陽が空を一気に明るく染めている瞬間を描いており、両者の違いは明らかである。

以上、新聞記事と平川の記事から藤島の台湾での行動を辿ったが、従来知られていた以上に活発に各地を回ったことが明らかとなった。平川は藤島が一回目の台展審査員として訪れた際に鵝鑾鼻や四重溪温泉を案内していたことを思い出しているが、『台南新報』の記事が平川の言葉を裏付ける。それによれば藤島は「二十七日赴鵝鑾鼻方面視察。同夜于四重溪温泉一泊。二十八日。将赴屏東郡視察蕃地。同夜帰高。泊于港口官舎」⁽³⁹⁾とあり、



臺灣にて (昭和八年)中央、藤島武二、右端は梅原龍三郎氏

図1 台湾にて 中央・藤島武二、右隣・結城素明、右端・梅原龍三郎

台南、鵝鑾鼻を訪れ四重溪温泉に一泊、屏東のサンティモン社を見て高雄に戻っていたことが明らかとなる。翌1934年の二度目の出張の際には阿里山に赴き、祝山から新高山を描き、また台南に行っている。さらにこの冬には台南を自発的に再訪して年末から正月にかけて一ヶ月ほど滞在をした。1935年、三度目の台展審査員出張の際の行動については『台湾日日新報』の記事が無い。この時には審査員として梅原龍三郎が共に任命されていた。藤島と梅原がサオ族とみられる原住民と一緒に写った写真がある〔図1〕。しかし岩佐新、長谷川仁編『藤島武二画集』（藤島武二画集刊行会、1943年）では、この写真に「昭和八年」とキャプションを付けている。1933年にも梅原は台湾に居り、藤島の隣にいるのは結城素明のようであるから、やはり1933年の写真であろう。

三、藤島が好んだ画題

1937年1月1日の『台南新報』では「台湾の画題」と題した記事で藤島の談話を紹介している⁽⁴⁰⁾。ここで藤島は4回、主に秋と冬に台湾に行ったと述べており、これまで確認してきたことと一致する。ここでは自分が好んだ台湾の画題について、様々な場所を列举してその印象を述べている。これについて順を追ってみてゆき、藤島の残したスケッチブックや作品と対照してみよう。

まず台湾に行く前に通る「瀬戸内海沿岸の景、波の形、日の入り、日の出と画題は尽きない。私はいつも往復で十枚ばかりスケッチを船中で描き上げる」と語っている。そして台湾で画題となる場所として筆頭に挙げるのは



図2 藤島武二《台南聖廟》1933-35年 宮崎県立美術館蔵

「台南孔子廟」である。「主として台南を中心に滞留して居たが、南部地方には画になる所が多い。(中略)。台南の孔子廟くらゐ味のある建築は少い。形式が古く単純で、画として何ともいはいれぬ面白みがある。他所の廟は屋根の飾が多すぎたり凝りすぎたりして台南の孔子廟の単純の美に遠く及ばない」と絶賛している。藤島が孔子廟を描いた作品は数多いが、この言葉から、それらは基本的に台南で描かれたと考えてよいだろう。確かにそりかえる屋根を繰り返し描いており、屋根へのこだわりがあったことを裏付ける〔図2〕。

次に挙げるのは「高雄」。「海、山の変化に富んだ実にいい所だ。ただ準要塞地帯で勝手に画をかくわけに行かないのが残念だつた。私が行つた時、丁度正月にぶつかつた時があつたが、港に船が輻輳し、これがみんな万国旗を飾つて、それを山の上から見た眺めは何んとも言へなかつた」と述べている。現在残されている台湾関連とみられるスケッチブックのなかには、孔子廟を様々な位置からスケッチしたものが数冊ある。その中には万国旗や旗で飾った船や港の景色をオイルパステルも使って描いた図が多数ある。藤島の言葉に基づけば、これらは1934年年末から35年正月にかけて台南に滞在したときに描いたものと考えられる。港に停泊した船が万国旗を飾っているオイルパステルによる《港》⁽⁴¹⁾という作品もあるが、スケッチブックに照らすならば高雄の港の正月の風景を描いたと考えられよう。

台湾の画題として藤島は次に鵝鑾鼻を挙げる。「一体に西部海岸には趣のある所が多かつたが、交通が不便な事と泊つて画く宿に乏しく、日数を懸けて画くには不自

由だが、鵝鑾鼻あたりは燈台にでも泊めて貰つて画いたら、良い画が沢山かけさうに思へた。あの道の、何ともい^{ママ}てない淋しい感じ、それを生かし^{ママ}へ画いたらとしみじみ思つたことである」と述べているので、このあたりの海岸を何カ所か目にして制作の可能性に思いを巡らせたようである。この言葉から思い出されるのは、藤島が花蔭亭壁画のために昭和天皇が訪れた本州最南端の地、潮岬で写生をした際に燈台の監視長の家に泊めてもらおうとしたが留守で果たせず隣の神主、塩崎巖氏に部屋を提供してもらって滞在したという経緯である⁽⁴²⁾。その後藤島は招かれて室戸岬を訪れ、「潮岬は本州の南端、ここは四国の南端で、やはり一脈の似通った感じがある」と述べているので、藤島が鵝鑾鼻を訪れようとしたのは、ここが台湾最南端の地であったからであろう。しかし実際にはまとまった写生はできなかった様子を読み取れる。

次に「阿里山」を挙げる。「ここには暫く滞留して画いて来たが、殊に雲海などはいいい画題になる」としている。台湾で使用したとみられるスケッチブックの一つのなかには、山々がたたなずく山岳風景を鉛筆と水彩で描いた図が6頁にわたってある。これらは時間をかけて描いた様子である。また、整理の過程で「黄7」とされていた、表紙に「ESQUISSE」と書かれたスケッチ帖には、船から見渡した海の波が延々と描かれ、水平線から上る日の出の図もある。前述のとおり「瀬戸内海沿岸の景、波の形、日の入り、日の出と画題は尽きない。私はいつも往復で十枚ばかりスケッチを船中で描き上げる」と述べていたことと合致し、台湾行きの船から描いたのだろう。

そのスケッチ帖の少し後ろの方には山の写生が続き、その中の一枚には「阿里山雲海」と書き込まれている。藤島は1934年に新高山を描くために阿里山には行っているが、阿里山を描くためには別のところに登らねばならない。しばらく滞留したということからは、1934年から1935年にかけての自由な滞在の間に高雄と一緒にまわった可能性があるだろう。

次に挙げるのが「新高山」である。「新高山について思ひ出すのは、祝山から見て、新高山に日の上る景である。台湾画旅行中に於ける指折りの景であつた」としており、皇室に納める目的には不向きではあったが、それを離れれば、よい風景であつたと感じていたのだろう。

その次が「サンティモン蕃社」で、「是非もう一度行

つてゆつくり画いて来たい所だ。蕃人の生活の壮快さ、山のあちらこちらに、異風采の蕃人の現れる様子など如何にも面白いと思つた。沢山のスケッチを取つて来た」と述べている。本当はどこかの蕃社に泊めてもらい長期間に亘って描いたかと考えており、旅行者には無理でも「土地の人には便利があらうから試みてみたらと思ふ」と述べている。

そして次に「東海岸」を挙げ、是非と人から勧められてまだ行ったことが無いとし、その他では「舟便は悪いが、紅頭嶼島の景色も悪くない。鹿港には行かなかつたが、行つてみたい所の一つだ」と述べている。サンティモン社についての発言と併せて読むならば、紅頭嶼島を勧めたのは二度目の審査員で台湾入りしたときに同船であつた、かつて藤島教室だった顔水龍ではなかっただろうか。

もう少し藤島のスケッチブックと照らし合わせてみよう。まず、1933年には台南に行き、鵝鑾鼻、四重溪温泉、屏東のサンティモン社、高雄に赴いている。藤島のスケッチブックの中の「黄4」と分類され表紙に「ESQUISSE」と書かれた小型のものには、鉛筆で7頁にわたって波のかたちを写生した図があり、次の頁には「南勢湖にて」と書かれた台湾の原住民の女性のスケッチがあるので、台湾往きの際に持参したスケッチブックであることがうかがえる。その次には2頁、やや高台から見下ろす海岸の景色が写生されている。さらにその次の頁には「四重溪公共浴場」と書かれた山に囲まれた川沿いの風景が描かれている。そしてその次には海岸風景、船を漕ぐ人たち、男性の肖像が続き、また民族衣装の原住民のスケッチがあり「タイヤル族女兒」と書かれている。このスケッチブックにはさらにペン描きのスケッチが続く。

藤島がスケッチブックを最初の頁から几帳面に使用して一冊ずつ終えてから次に移ったかどうかは不明であるが、波は藤島が台湾に行く際に描いたものである可能性があり、その後四重溪温泉のスケッチは1933年の際に描いたものだろう。しかし同じスケッチブックの中に描かれている原住民は、一方は南勢湖で台湾の北端方面で描いており、もう一方はタイヤル族なので、こちらも台湾の北部で描いたものである。藤島は鵝鑾鼻への旅とは別に台湾北部をも回っていたことになる。

また前述の「阿里山雲海」の書き込みがある山岳風景

のスケッチ帖の後ろの方には海と太陽、その後夜の海の波が写生されている。台湾の往復の船からの海景にも藤島が強い関心を向けていた様子をうかがうことができる。

台湾で描いたとみられる作品の多くは、隈元謙次郎の画集以後制作年が特定されておらず 1933—35 年とされている。藤島の生存中に出版された『みづゑ』の藤島特集号とも言うべき 1940 年 9 月号に掲載された図版では制作年が書かれている。また遺作展の図録にも制作年が記載されている⁽⁴³⁾。「藤島武二遺作展覧会 (東京)」と「藤島武二展覧会 (大阪)」の二部から成り、東京展については「東京展出陳目録」があり題名、大きさ (号数)、制作年が書かれているが、図版部分には題名のみで出陳目録番号の記載が無い。しかし図版については「写真目次」が別にあり、ここに題名、大きさ、制作年が書かれているので、ある程度出陳目録と照合は可能である。大阪展については「出陳作品」のリストには題名と大きさ (号数) が書かれているのみで作品番号も振っていない。こちらにも図版の頁があり「写真目次」があり、このリストには番号が振られ、大きさ (号数) と制作年が書かれている。このように非常にわかりにくい構成になっているが、裏表紙の見返しに岩佐新による「後がき」が掲載されており、最後に「制作年代等に就いては、御存命中伺つてあるものもあるが、不明のものも多い。一応研究の結果、推察に依つたものもあることを序でながらここでおことわりして置く」と書かれている。

岩佐はぎりぎり藤島の存命中に校了したとされる 1943 年出版の画集も監修している。しかし例えば《蕃女》という作品は画集では 1935 年作、遺作展 (大阪) では 1934 年作になっているといった齟齬がみられる。この作品は『みづゑ』でも 1934 年となっている。『みづゑ』の「編集後記」には「制作年代は先生に伺ひ記入いたしました。然し古い事で中には不確実のものもあります」と記されている⁽⁴⁴⁾。藤島がなぜか作品に年記をいれなかったことが原因であるが、展覧会出品作以外に関してはこれらを参照する他はない。

さらに藤島の場合には見たままを描く写実を重視してはいないため、描いた場所を特定することが困難であることもしばしばである。1943 年の画集に《港の正月 (土佐)》(1935 年) として掲載されている作品は遺作展の《港の正月》(1935 年) と同じものである。また同作は『新美術』



図3 藤島武二《港の正月》

の「藤島武二特輯号」にもカラー図版で掲載されているが、ここでは《港の正月》の題名である〔図3〕⁽⁴⁵⁾。これまでに見て来たように藤島は 1935 年の正月には台湾の高雄でこうした情景を山上から見ていた。本作が土佐の正月であれば 1935 年ではなく、1935 年であれば高雄の正月 (台湾は旧暦のため実際には正月直前) を描いたと考えられよう。ちなみに《旭光 (新高山)》も『みづゑ』では《新高山の日の出》、1934 年となっている。

また藤島は前述のとおり台湾の往復に通る瀬戸内海沿岸の景、日の入り、日の出に魅了されていた。「藤島武二作品目録《油彩》」⁽⁴⁶⁾の「四一四、瀬戸内海の日の出」、「四一七、瀬戸内海の陽光 一九三三 (昭和八年)」、「四一八、瀬戸内海の日の出 一九三四 (昭和九年)」、「四一九、日の出 (瀬戸内海) 一九三四 (昭和九年)」の中には、台湾に向かう船中の体験に基づく作品が含まれている可能性があるだろう。1934 年 8 回台展審査のために台湾に入った際、藤島は朝日丸に乗船していた。朝日丸は日本郵船が運航していた台湾への高速船で神戸港から門司を経由して基隆に直行する船だった⁽⁴⁷⁾。藤島は神戸を何度も訪れたようであるが⁽⁴⁸⁾、《神戸港の朝陽》(1934 年、京都市美術館)、《港の朝陽》(1934 年、東京国立近代美術館) も台湾出張に基づく可能性はあるだろう。

岩佐新は遺作展の実行役であったことをふり返る文章のなかで台湾で描いた作品として「蕃女」をはじめ「台湾の女」の諸作、また「聖廟」の諸作等佳作がある。海では「荒れる日」が優れている」と述べており⁽⁴⁹⁾、これに基づけば《荒れる日》は台湾の海を描いたことにな

る。遺作展には所蔵家の都合で出品できなかったということであるが、新制作展に送った同名の作品である可能性があるだろう。

しかし藤島が台湾で最も魅了されたのが台南の聖廟であったことは、スケッチ、完成作の数の多さからして間違いない。『台南新報』のインタビューでは「形式が古く単純で、画として何ともいはいれぬ面白みがある」、「台南の孔子廟の単純の美に遠く及ばない」と短い言及のなかで二度「単純」という言葉を用いている。晩年風景画でも追求した「シンプリシティ」とも通じるものである。それでも孔子廟には様々な装飾があり、スケッチブックでは「大成坊」の扁額や屋根の上の飾りなども様々な角度からスケッチをしている。しかし油彩画では孔子廟の建物の一部を切り取り、べんがら色の壁を中心に据えて描いた作品が多い。近年国立台湾美術館所蔵となった作品も、孔子廟の外側の塀を遠くから描いており、藤島は孔子廟そのものの持つ宗教的、文化的な背景には興味が無く、造形的な観点からのみ見ていたようである。それはモダン・アートの考え方であるが、一方で台湾の歴史や文化の独自性に関心を持つことがなかったことを示している。聖廟の写生に留まらず、藤島の作品には台湾で生活する人々が全くといってよいほど描かれていない。

ところで、1933年の台湾出張後、藤島は翌1934年1月3日午後6時到着の列車で故郷の鹿児島を訪れ、8日朝7時13分の汽車で宮崎市に向けて出発し、別府に立ち寄っている⁽⁵⁰⁾。台湾から直接鹿児島に行くには間が空きすぎているので、おそらく一度東京に戻って、再び鹿児島に向かったのであろうが、忙しい日程である。藤島自身、「明治十七年上京して以来今回が初めての帰郷」と述べているが、その目的は「墓参旁墓地整理のため」であったという⁽⁵¹⁾。多数の出迎えを受け故郷に錦を飾ったようであるが、五十年振りの帰郷が墓地整理ということでは、むしろ故郷に別れを告げる旅であったと言えることができる。実際に藤島は1932年7月15日に東京都の青山霊園の使用を申請している⁽⁵²⁾。6日には桜島周辺を廻り製陶所を見学するなど案内を受けているが⁽⁵³⁾、正味4日間だけの滞在であった。別府でも数日滞在すると出発し、各地に絵行脚の予定と伝えられている⁽⁵⁴⁾。藤島のこの帰郷について、台湾で同行した同じ鹿児島出身の平川は「今年の正月幾十年振りで郷里へお帰りにな

られたさうだが、矢張生まれ土地は恋しいものだと言つてゐられた」⁽⁵⁵⁾と伝えている。藤島のなかでも故郷に対して相反する気持ちがあった様子をうかがえそうである。

おわりに

藤島は旅のなかでも平川に鹿児島の話しをしており、また同郷の画家有馬さとえにも後年故郷での子供時代の思い出話を語ったという⁽⁵⁶⁾。故郷を思いつつもそこに帰ることが無く旅を繰り返す藤島にとって、台湾は鹿児島に代わる南の故郷のような居心地の良さがあったのかもしれない。台湾では中央から来た特別な人物として丁重に遇される一方で、東京での堅苦しい社会的な事情からは自由であつただろう。重責であつた「日の出」の作品を離れて孔子廟の周囲を歩き回って写生する時間は自分自身の自由な制作に没頭できる時間であつたのかもしれない。

とはいえ、藤島の描いた孔子廟は、建物の一部を切り取る構図のものがほとんどである。本来孔子廟が持っていたはずの台湾での歴史的な意味は読み取れず、ここを訪れていたはずの多くの台湾の人々は描かれていない。造形的な構成として画面に写していることはモダニズム的な態度ともみることができが、それは支配する側によって現地の文化、歴史から切り取られたものであつた。

藤島は皇室の依頼を背負って台湾で新高山の日の出を描いたが、それから約半世紀後に顔水龍は《玉山日出》(1986年、個人蔵)を描いている。藤島と一緒に台展審査に出張した顔は藤島が日の出を描いた事情をよく知っていたであろう。顔が《玉山日出》を描いた経緯については、戦後の台湾の長きにわたる複雑な政治状況を踏まえて考えねばならないが、結果的に本作品は、日本統治下に「新高山」として奪われた台湾の領土と文化のアイデンティティを取り戻す行為となつたと読み取ることができるのではないか。原住民の暮らしと文化を尊重し、工芸品の近代化に尽力した顔が見いだした「故郷」がそこにもあつたのだろう。この問題については別稿で論じたい。

註

- (1) 本稿の一章、二章は、明治美術学会誌『近代画説』33号、2024年、55・61頁、児島薫「藤島武二の台湾出張―旭光（新高山）制作の背景について」に基づいて加筆し、三章以降を新たに書き加えている。
- (2) 台湾総督府編『台湾事情 昭和九年版』1934年、177-178頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1157111> (参照 2024-06-23)。
- (3) 台湾総督府編『台湾事情 昭和十年版』1935年、185-186頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1114948> (参照 2024-06-23)。
- (4) 台湾総督府編『台湾事情 昭和十一年版』1936年、193-194頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1114978> (参照 2024-06-23)。
- (5) 隈元謙次郎『藤島武二』日本経済新聞社、限定版、1967年、34頁。
- (6) 「藤島武二年譜」『藤島武二画集』1998年、日動出版部所収、340-353頁。
- (7) 「以外に立派 藤島武二画伯の西洋画審査感想」『台湾日日新聞』1933年10月25日、二面。
- (8) 「藤島結城両氏 招待の午餐会 けふ総督官邸で」『台湾日日新聞』1933年10月26日、二面。
- (9) 「藤島画伯を招待して懇親会」『台湾日日新聞』1933年11月3日、二面。
- (10) 「台展審査員決まる 松林桂月、藤島武二 両氏が内地から来台」『台湾日日新聞』1934年9月9日、二面。
- (11) 「ローカルな気分を出すものを選びたい 台展審査員 藤島、顔両氏が語る」『台湾日日新報』1934年10月17日、七面。
- (12) 「審査がすめば阿里山へ 藤島画伯談る」『台湾日日新報』1934年10月17日、七面。
- (13) 同前。
- (14) 「新帝展 一日一人 藤島武二」『朝日新聞』1935年6月26日、三面。中島氏の年譜の記述はおそらくこの記事を元にしたものである。このことは貝塚健氏に指摘していただいた。
- (15) 「台展の出品搬入十八、九両日 審査は廿、廿一日」
- (16) 「朝日丸入港 相馬、吉田、藤島氏語る」
- (17) 「吉野丸を殿りに熱産委員みな来台 台展審査員の四画伯も」
- (18) 「熱産委員や四画伯渡台 吉野丸、神戸を出港」
- (19) 「質の向上を認む 審査を終へて 各委員語る」
- (20) 『新高阿里山』阿里山国立公園協会編、発行、3号、1935年1月、20-23頁。この貴重な文献は蔡家丘氏（国立台湾師範大学区芸術史研究所）より十年ほど前にご教示とご提供をいただいた。その後使用する機会が無かったが、改めて記して感謝の意を表する。後述するように蔡氏は博士論文のなかでこの資料を用いて藤島の作品についても論じている。
- (21) 「台展資料庫」によると《静物》など毎回1点を出品している。https://ndweb.iis.sinica.edu.tw/twart/System/database_TE/04te_search/ListForm.jsp (参照 2024-06-23)。
- (22) 中央研究員臺灣史研究所「臺灣総督府職員録系統」<https://who.ith.sinica.edu.tw/search2result.html?h=SUJMJ0S58NSA3jEBBQFLy4zuX7ShpCiYbtmuokPxGvre5Y6WPAAeqqHhfFsm0KSz> (参照 2024-06-23)。
- (23) 平川知道「藤島先生にお伴して」20頁。
- (24) 同、22頁。
- (25) 『台南新報』1933年10月28日夕刊、四面、「藤島画伯視察南部」<https://newspaper.nmth.gov.tw/search/detail/R-04-000965-94824026> (参照 2024-07-25)。
- (26) 中島氏の年譜では新高山取材が1933年と書かれており、以後の年譜もこれを踏襲しているので訂正しておきたい。
- (27) 以下旅程は前掲、平川知道「藤島先生にお伴して」20-22頁。
- (28) 同、20頁。
- (29) 同、21頁。
- (30) この経緯については以下の拙稿で詳しく論じた。児島薫「藤島武二・旭日を描く旅―花蔭亭壁画と御学問所を飾る絵画の制作について」『近代画説』19号、2010年、18-34頁。
- (31) 蔡家丘氏博士論文「1910年代―1930年代における日本人画家の東アジア旅行と創作についての研究―地域と文化に絡む東アジアの図像」（筑波大学大学院人間総合科学研究科、2014年学位授与）107頁。
- (32) 藤島武二「内蒙の日の出」『塔影』13巻9号、1937年9月、2-3頁。
- (33) 同上。
- (34) 以下の論文では、明治天皇が各地を巡幸し、その御手許に写真や絵画などがもたらされたことに古代の「国見」に通じる「統治」の意図があったと論じている。梶田明宏「〈明治天皇御手許写真〉と明治天皇のまなざし」『明治天皇 邦を知り国を治める―近代の国見と天皇のまなざし』宮内庁書陵部・宮内庁三の丸尚蔵館、2015年、4-8頁。
- (35) 「内蒙の日の出」『塔影』13巻9号、1937年9月、2-3頁。
- (36) 同上、3頁。
- (37) 本作は、藤島が亡くなる前に目を通したとされる湯澤三千夫監修、岩佐新・長谷川仁編『藤島武二画集』藤島

武二画集刊行会、1943 年、収録の図 100 であり、画集では制作年を 1934 年としている。

- (38) 蔡家丘、註 31 の論文、107-108 頁。
- (39) 「藤島武二画伯 視察南部」『台南新報』1933 年 10 月 29 日、四面。
- (40) 「新春特輯台湾玉手箱 台湾の画題 藤島武二」『台南新報』1937 年 1 月 1 日、二六面。https://newspaper.nmth.gov.tw//storage/digitalFiles/R-04-001285-396781/pdf/R-04-001285-396781_19370101010126.pdf（参照 2024-08-14）。
- (41) 《港》と題されたパステル・紙、205 × 25.9 cm、1977 年 4 月 9 日-24 日、日動サロン「日動画廊創業 50 周年記念・笠間日動美術館開館 5 周年記念 藤島武二展」に出品のシールが額の裏面に貼られた作品がある。（2017 年 4 月 27 日調査）。
- (42) 藤島武二「海の色、海の力」『美術新論』6 巻 8 号、1931 年 8 月、4-9 頁。「潮岬と室戸岬」『塔影』2 巻 6 号、1936 年 6 月、9-12 頁。宮本久宣「本州最南端と五人の画家をめぐる 原田直次郎、富田溪仙、鹿子木孟郎、浜地清松、藤島武二」『描かれた紀伊山地の霊場と参詣道』和歌山県立近代美術館、2009 年、7-11 頁。
- (43) 岩佐新編、長谷川仁発行人、藤島武二遺作展覧会事務所発行『藤島武二遺作展覧会目録』1943 年 10 月。
- (44) 『みづゑ』1940 年 9 月、430 号、402 頁。
- (45) 『新美術』28 号、1943 年 11 月（頁数無し）。
- (46) 『藤島武二画集』日動出版部、1998 年。
- (47) 『台湾海運史』台湾海務協会、1941 年 7 月、38-68 頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dlndl.go.jp/pid/1904493>（参照 2024-08-15）。
- (48) 貝塚健氏は「141 神戸港の朝陽」（『藤島武二展』図録、ブリヂストン美術館、石橋美術館、2002 年、136 頁）の作品解説で「藤島は紀行文でも、あるいは作品の題材としても神戸に言及したことはない。しかし、神戸をたびたび訪れていたのは確実だ」とのべている。また貝塚健「風景画家の誕生と成熟：藤島武二の晩年」（同図録、246-249 頁）で 1936 年に藤島が神戸を訪れたことに言及している。
- (49) 註 45 の『新美術』28 号、岩佐新「藤島武二遺作展に就て」14 頁。

- (50) 藤島による鹿児島、別府訪問については鹿児島市立美術館谷口雄三氏よりご教示と新聞記事のご提供を受けた。谷口氏はこれについて「藤島武二の帰郷と 15 歳時の写真」『グリーンルーフ』83 号、2018 年 1 月 31 日、で述べている。
- (51) 「鹿児島の画壇は大に振はねばならぬ きのみ五十年振りに帰った 藤島武二画伯談」『鹿児島新聞』1934 年 1 月 4 日、七面。藤島の出京を藤島自筆の未公刊「略歴」と同じく明治十七年としている。
- (52) 「墓地使用申請書本郷区駒込曙町 藤島武二」1932 年 7 月 15 日、『墓地使用 雑件 冊の十九』1932 年（315.F1.08）、東京都公文書館所蔵。
- (53) 「藤島武二画伯桜島を描く 六、七両日画帖を掲げて 八日宮崎を経て帰途へ」『鹿児島新聞』1934 年 1 月 9 日、七面。
- (54) 別府を訪れたことは大分市立美術館岩尾信氏から鹿児島市立美術館谷口雄三氏に示された。『大分新聞』1934 年 1 月 9 日、二面。
- (55) 註 23 の平川知道「藤島先生にお伴して」20 頁。
- (56) 有馬三斗枝「城山のイチゴ」『少年少女文学風土記 4 ふるさとを訪ねて 4』泰光堂、1959 年、205 頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dlndl.go.jp/pid/1629084>（参照 2024-12-17）。三國博子氏よりご提供いただいた。

本研究は、JSPS 科研費令和三（二〇二一）～六（二〇二四）年度基盤研究（C）（一般）の研究「日本と台湾における都市からみる「故郷」の表象とその比較——一九三〇年代を中心に」（JP21K00170）の助成を受けた研究成果の一部である。

また本稿の内容は先に明治美術学会『近代画説』33 号に「藤島武二の台湾出張—《旭光（新高山）》制作の背景について」（55-61 頁）として発表した原稿に大幅に加筆したものである。

貴重な平川知道の文章をご提供くださった蔡家丘氏、適宜台湾近代美術情報についてご教示くださった羽田ジェシカ氏に感謝いたします。また画像掲載の許可を下さいました宮崎県立美術館にお礼を申し上げます。

児島薫（実践女子大学文学部美学美術史学科教授）

発 行 2025 年 2 月 1 日
編 集 兄 島 薫
実践女子大学文学部美学美術史学科
制 作 学藝書院